



「恐れずにチャレンジ」、「地域と一緒に成長」 茨大出身の記者がシンポ

第3回新聞マルシェ

茨城大学と茨城新聞の連携事業「新聞マルシェ」の第3回シンポジウムが1月13日午後、茨城大学図書館のライブラリールームで開催され、人文学部卒業の現役記者の3人が、地方紙のあり方について、自由闊達に意見交換した。

「地方紙の現場、未来への想い」とタイトルのシンポには、卒業生の茨城新聞の小原瑛平記者（原ロゼミ出身）、

秋田魁新報の藤田祥子記者（古賀ゼミ出身）、デーリー東北の田沢奈々記者（古賀ゼミ出身）らがパネラーとして出席、コメンテーター役に長田華子准教授を据え、4年の後藤結有の司会でスタートした。



基調講演で、茨城新聞の小田部卓社長が「“地域応援宣言”で地元重視の茨城新聞は、これからも茨城県のために活動する」とその決意を表明した。

シンポは、これまでに印象に残った取材から入った。小原記者は、戦後70年記念の関連で、かつては敵同士であった日英の元兵士の遺族がひよんな出来事から知り合いとなり、面会にこぎつけた案件を挙げた。スポーツ担当の田沢記者は、「100年の節目となる高校野球企画で関係者を訪ね、その一つ一つにドラマがあり、感動した」と強調、藤田記者は、「県内の複合施設建設構想の取材で賛否を両サイドから取材し、とてもためになった」と振り返った。

地域と地方紙の関連で、「県が1億円支出しているソウル便の運休の是非について、地域振興の在り方を考えさせられた」（藤田記者）、「生活困窮者支援が他県と比べ遅いとの記事が県議会で取り上げられ、県民が考える機会となった」などの声が聞かれた。

超多忙なイメージのあるマスコミの現場や女性活用法については、「イメージよりは忙しくない。大変な時もあるがずっと続くわけではない」（小原記者）、「不規則な生活になりがちだが、すごくワクワクするような取材もあり、また頑張ろうと思える」（田沢記者）などの体育会系の記者特有の反応も聞かれた。

長田准教授は、「記者のプライドや記者個人のやりがいに依存するのは問題がある。企業



は、最低限のワークバランスを保障すべき」と釘を刺した。

将来展望については、3人の記者が「地域と一緒に成長を目指していける仕事」（小原記者）、

「地方紙がなくなったら世間に出ない地元ニュースはなくなる。変わることを恐れずチャレンジすることだ」（田沢記者）、

「これだけ多くの地元の情報が盛り込まれているのは地方紙しかない。多くの人に読んでもらいたい」（藤田記者）と語った。

最後に長田准教授が「地方紙の重要性をあらためて認識した。記者そして地方紙の力が試されている」と締めくくった。

シンポ終了後には、JR水戸駅近くの老舗の居酒屋「満月城」で懇親会を開催、パネリストや長田准教授はもちろん、茨城新聞からは茨城大出身の記者が10人以上も参加、茨大の教員や学生との語らいや口角泡飛ばせての白熱した議論が交わされていた。

(終)

